

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	細野 香里
<p>主論文題名： Double-faced Maps: The Georacial Imagination in Mark Twain's Works (裏返しの地図——マーク・トウェイン作品における人種的他者表象と地理的想像力)</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>中西部に位置するミズーリ州の奴隷がいる共同体で育ったマーク・トウェイン(Mark Twain, 1835-1910)ことサミュエル・クレメンズ(Samuel Clemens)が、南北戦争を経験した19世紀アメリカにおいて、作家としていかにアフリカ系をはじめとした人種的他者を巡る葛藤に向き合ったのか。本論は、これまで多くのトウェイン研究者によって吟味されてきたこの問いを、地理、あるいは地域が持つ意味を踏まえて再考することで、マーク・トウェイン研究に新たな視座をもたらすことを目的とする。具体的には、トウェインがアフリカ系をはじめとした人種的他者を表象する際に、小説作品の舞台、あるいは旅行記で紹介する異国の地が喚起する地理的想像力をいかに技巧的に利用していたか、あるいは、そうした地理的想像力が、時に書き手の意図を超えて、作品世界にどのような効果をもたらしているかを吟味した。</p> <p>トウェイン研究において、人種というテーマは飽和状態にある。<i>Adventures of Huckleberry Finn</i> (1885)における奴隷制の問題、そして本作品が書かれた再建期以後のアメリカにおける黒人に対する抑圧の問題はもちろん、アフリカ系以外の人種的他者を扱う議論も数多く提示されてきた。Shelley Fisher Fishkinによる1994年の著書 <i>Was Huck Black?: Mark Twain and African-American Voices</i> をもって、トウェインとアフリカ系アメリカ人についての議論はひとまずの頂点を迎えた格好になり、以後、中国系移民やネイティブ・アメリカン（に対する直接的言及の少なさ）といったアフリカ系アメリカ人以外の人種的他者との関わりについての研究も発表されている。Hsuan Hsuによる著作 <i>Sitting in Darkness: Mark Twain, Asia, and Comparative Racialization</i> (2015)がその例である。とはいえ、トウェインと人種的他者の問題はもう語りつくされたわけではない。また、トウェインと地理的想像力という観点についても、旅行記研究や特定の国・地域についての議論はなされてきたものの、トウェイン自身の移動とそれに伴うアイデンティティ形成については、議論の余地がある。</p> <p>本研究の重要な背景として、マーク・トウェインの伝記的背景と人種観の変遷がある。中西部に位置するミズーリ州の奴隷がいる共同体で育ったトウェインは、奴隷制を既成の社会制度として受入れ、南北戦争時には南軍側について義勇兵となった。しかし</p>			

すぐに脱落し、戦時中に兄オーリオンとともに西部準州に向かい、西部出身のユーモア作家マーク・トウェインとしての名声を手に入れ、東部の良家の娘オリビアとの結婚を果たした。その過程で、奴隷制支持の思想を徐々に変化させ、1885年の作品 *Adventures of Huckleberry Finn* では主人公ハックに、逃亡奴隷のジムをかくまうという決断をさせるまでになる。いわゆる「南部人」としての出自が人種問題を巡る葛藤を生んで彼を苦しめ、西部作家という肩書が成功をもたらし、東部社会への参入が自身の過去についての更なる後ろめたさをもたらした。この意味で、トウェインにとって地域間の移動と、自身の過去、そして特に人種的他者を巡る個人的葛藤は深く結びついていた。Forrest Robinson は *The Author-Cat: Clemens' Life in Fiction* (2007)において、トウェインは、自伝ではなく創作作品でこそ自身の伝記的背景を間接的に、つまりより安全に語る事ができると考えていたこと、よって彼の創作作品においては、自身の過去に折り合おうとするトウェインの葛藤がより露わになっていることを論じた。ちょうど猫の砂かけ行為のように、トウェインは書き手としての意図的な操作によって、あまり語りたくはない自らの過去に覆いをかけつつも、確実に創作作品にそれを反映させている。この指摘を踏まえ、本論では、Robinson のいう砂かけ行為を可能にした方策として、地理的想像力が利用されていた可能性を指摘する。トウェインが作家として構築してきた創作上の舞台は、トウェイン本人が実際にそこで過ごした過去と再訪した際に目の当たりにした変化、そして作中で描かれる虚構の世界観というように、同じ一つの「場所」を何層にも上書きすることによって、構築されている。このような重層的な舞台においてトウェインがいかに人種的他者との邂逅を描きこんでいるかを、トウェインの伝記的背景と作品解釈の両面から分析してゆく。

本論におけるもう一つの重要な背景として、19世紀アメリカの領土拡大と人種問題の不可分な関係性がある。そもそもアメリカがかくも多様な人種の人々を身内に抱えることになった背景には、アメリカ国家が地理的拡大によってその形を成し、保ち、発展してきたということ、その領土拡大は、ネイティブ・アメリカン、アフリカ系アメリカ人、メキシコ人、そしてハワイをはじめとする海外領土の有色人種の抑圧と不可分であったという紛れもない事実がある。先住民の土地を収奪し、西漸運動を続け、そのまま太平洋へと進出したアメリカの、人種的他者を巡る葛藤を考える上でも、単なる地域性という言葉に集約されない地理的想像力に目を向ける必要がある。作家マーク・トウェインは、南北戦争を経て、奴隷解放、移民の流入、飛躍的な技術革新という目まぐるしい変化を遂げた19世紀中葉から世紀転換期にかけてのアメリカ社会を生き、体現した人物である。彼のたどった旅路は、そのまま植民地あがりの後進国から「帝国」へと変貌するアメリカの歩みと共にあった。本論文では、トウェインを巡る流動的・有機的な地理

的想像力について、南北戦争を経て、世紀転換期に帝国主義に傾くに至るまでのアメリカ合衆国が辿った時代の変遷を考慮に入れつつ、異なる土地を舞台とした作品群の分析を通じて吟味する。具体的には、南北戦争以前の奴隷のいる共同体を描く *Adventures of Huckleberry Finn* と *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* (1894)、インディアン居住区を舞台とする未完の “Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians”、気球での大西洋横断の旅を描く *Tom Sawyer Abroad* (1894)、サンドイッチ諸島に取材する *Letters from Hawaii* (1866) と未完の原稿 “Sandwich Islands Novel” を扱う。南部作家とも分類されるトウェインは、奴隷制を巡る北部・南部の対立について常に意識的であった。加えてトウェインは、先住民の土地を収奪し、西漸運動を続け、太平洋へと進出したアメリカ国家の人種的他者を巡る葛藤をなぞるように、西部ではネイティブ・アメリカンや中国系移民と、サンドイッチ諸島ではネイティブ・ハワイアンと出会い、彼らについての記述を残していることに着目し作品を分析する。

トウェインが、人種問題を主とした自身の過去を巡る葛藤を、地理的想像力を利用していかに作品創作に投影していたか、あるいはいかにそれが図らずも作品世界に影を落としているかを論じる前提として、彼の語りの技術に着目する必要がある。トウェインの語りは、西部出身のユーモア作家マーク・トウェインとミズーリ出身のサミュエル・クレメンズという二つの人格の間での個人的葛藤を押し隠す鎧としての機能を持っていた。この技術は、東部進出以後のトウェインと同じくコネティカットを拠点として活躍した 19 世紀を代表する興行師フィニアス・T・バーナム (P. T. Barnum, 1810-1891) の用いた宣伝手法とよく似ている。よって第一章では、トウェインの語りの技術を、バーナムとの関わりを通じて検討する。トウェインはバーナムと親交を育み、彼の見世物を創作に取り入れていた。それだけではなく、奴隷所有者の息子であり元南軍義勇兵であるトウェインと、元奴隷の黒人女性の搾取を通じて名声を得たバーナムは、自身の過去を語り直す「語り／騙り」の技術を共有していた。このことを示すために、本章では、バーナムの「ジョージ・ワシントンの 161 歳の元乳母」ジョイス・ヘスの見世物とトウェインの掌編 “General Washington’s Negro Body-Servant” (1868) の分析、および 1880 年代後半の、南北戦争の英雄グラント将軍に対する両者の援助の試みといった伝記的背景をもとに論じる。そして結論部では、トウェインがバーナムの自伝の中のエピソードから転用したとされる、*Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* (1894) における「半分の犬を殺す」冗談についての解釈を示す。

第二章では、*Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* と中国系の結合双生児チャンとエン (Chang and Eng Bunker, 1811-1874) を取り上げる。南北戦争以前の

南部の田舎町を舞台とする *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* は、中編 *Pudd'nhead Wilson* と、短編 “Those Extraordinary Twins” からなる二部構成の作品である。前者は白人と黒人の赤ん坊の取り換え子の行く末を描く悲劇、後者は町にやってきたイタリア人のシャム双生児が引き起こす混乱を活写する喜劇である。先行研究においては、白人の赤ん坊と黒人の赤ん坊の取り換え子という筋書のために、人種ロマンスとしての中編 *Pudd'nhead Wilson* が重要視されてきた。そこで、本章では、短編に登場するシャム双生児のモデルの一組となった中国系の双子チャンとエンの伝記的事実を確認する。1860年代に急増する中国系移民の先駆けとして、チャンとエンは中国系というエスニシティと奇形の身体という二重の制約がありながら、白人女性と結婚し南部大農園主として黒人奴隷を使役した点に注目する。トウエインは1869年の掌編“The Siamese Twins”で、当時流布していたチャンとエンについての逸話に基づき彼らの暮らしを描いているが、双子が黒人奴隷を使役していたという点については一切言及していない。この点を踏まえ、*Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* の作品全体に対し、シャム双生児のモチーフ、そして中国系という人種性がいかなる意味を付与しているかについて考察する。

第三章では、*Adventures of Huckleberry Finn* の作品舞台の地理的曖昧性を、主人公ハックの人種的属性の曖昧性、そして書き手トウエインの地理的・人種的アイデンティティの曖昧性と重ね合わせて分析する。主人公ハックの人種的属性について、Fishkin は前掲の著作で “Was Huck Black?” と問うた。この問いはハックの人種的属性を巡る解釈可能性の幅に光を当てた。コミュニティから逸脱し出自の曖昧なハックは、多人種的連関(multi-racial association)を持つ存在である。こうしたハックの属性の曖昧性・多層性は、*Adventures of Huckleberry Finn* という作品自体の地理的曖昧性・多層性に呼応する。作品の舞台である南北戦争以前のアメリカでは、南と北、あるいは南と西の区分は極めて流動的であった。こうした状況を反映するかのようには、*Adventures of Huckleberry Finn* は、南部奴隷社会に背を向けミシシッピ川を南へ下るという矛盾を孕んだ物語であり、また *The Adventures of Tom Sawyer* (1876) 序文や同時代の書評においては、その作品舞台は西として言及されている。さらに、トウエイン自身も、自分はネイティブ・アメリカンの子孫であるとうそぶき、西部出身のユーモア作家という肩書を強調しながら、南部奴隷社会という文化的背景を確かに背負っている。本章では、*Adventures of Huckleberry Finn* における人種的・地理的曖昧性が、作中でいかに互いに呼応し合い、独特の力学を生み出しているかを示した上で、先行研究においてしばしば批判の対象とされてきた、“evasion chapters” と称される作品最終部におけるトウエインの歯切れの悪さを吟味する。

第四章では、*Adventures of Huckleberry Finn* の続編作品 “Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians” と *Tom Sawyer Abroad* におけるトウェインの人種を巡る葛藤と、作品舞台であるフロンティアと疑似的オリエント世界の表象を検討する。いずれの作品もハックを語り手に、トムとジムを主要登場人物に据え、前者は西部地域での白人開拓者との出会いとネイティブ・アメリカンによる襲撃を、後者は気球での大西洋横断と、サハラ砂漠、エジプト、聖地を巡る旅を描く冒険譚である。本章ではまず、1884年に執筆されるも未完に終わった中編小説 “Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians” におけるフロンティア表象とトウェインのネイティブ・アメリカン観の分析を行う。具体的には、トウェインがいかに作中のネイティブ・アメリカン像を創作したかを、彼が執筆時に参照したとされる同時代の西部探検の手記や、彼自身の西部への旅の記録を参照し確認したうえで、トウェイン自身のネイティブ・アメリカン観の変遷を短編小説や手記での言及を追って整理する。そして、前作 *Adventures of Huckleberry Finn* において、ハックが自由を求めて向かったテリトリーの地が、西部フロンティアの持つ神話性の衰えと呼応するかのように、理想的な「新規まき直し」の地とは程遠い、過酷な現実を突きつける場として描かれていることを指摘する。そして、失われたテリトリーという逃避先の代替地として、トウェインが、*Tom Sawyer Abroad* における疑似的オリエント世界を創作したという解釈を示す。しかし、この疑似的オリエント世界にも、ポスト再建期アメリカのアフリカ系アメリカ人の処遇の問題、そして帝国主義の兆しが影を落としていることを論じる。

第五章では、ハワイ関連著作と未完のロマンス作品を扱う。1866年、トウェインは *The Sacramento Union* 紙通信員としてサンドイッチ諸島（現ハワイ諸島）に滞在し、25の通信文を執筆した。そこには、トウェインの人種混淆に対する相反する感情、つまり、身体的に内面化された社会規範に従い人種混淆を忌避する思いと、それに反して人種混淆の禁忌に魅力を見出す心の動きが反映されている。この点について、帰国後トウェインが行った講演や、1870年の掌編“Dining with a Cannibal”に触れながら論じる。また1884年には、トウェインはサンドイッチ諸島で出会ったネイティブ・ハワイアンと白人の混血の通訳者、ビル・ラグズデイル(Bill Ragsdale, c.1837-1877)を主人公にした未完原稿 “The Sandwich Islands Novel”を残している。この“The Sandwich Islands Novel”を、同時期に執筆が企図された“The Man with Negro Blood”の草案を参照しつつ、未完のロマンスとして再構築する。これらのサンドイッチ諸島についての著作の再検討を通じ、トウェインの太平洋上の楽園とアメリカの拡張主義への態度の変遷を辿る。

identity problem on his writings and his art of narration. Consequently, Chapter 1 examines his curious friendship or business relationship with the great showman From Taylor Barnum (1810-1891), and their attempts to reconstruct their own past experiences. Chapter 2 takes up *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* and suggests that the novel connotes the racial conflict between whites and other non-whites, that is, Chinese immigrants by focusing on one of the models for the "extraordinary twins," Chang and Eng, the original Siamese Twins. Chapter 3 reconsiders how racial/geographical ambiguities in *Adventures of Huckleberry Finn* and the versatile nature of Mark Twain himself overlap with each other, and how these ambiguities enable Twain to reconcile his emotional turmoil over the past. Chapter 4 deals with "Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians" and *Tom Sawyer Abroad*, which are set in the Western wilderness and the fictional Oriental world. In examining these stories, I will elaborate on how Twain's fictional Orient brings out the deceitfulness of the imperialist discourse and even discloses the author's warring emotions over racial others in the wake of US expansionism. Chapter 5 inspects Twain's writings on the Sandwich Islands, including his reports from the Islands as a correspondent in 1866 and the unfinished "Sandwich Islands Novel," clarifying the changes in his attitude toward the racial others both inside and outside the United States.

